

2012 7/24

No.1927

毎月第2・第4火曜日発行

# 政経 かながわ

一般社団法人  
— 神奈川政経懇話会 —



湘南に夏本番を告げる暁の祭典「はまかりさい濱降祭」（県指定無形民俗文化財）が16日、茅ヶ崎市南湖の茅ヶ崎西浜海岸で行われ、38基の神輿みこしが参加。海に入る「みそぎ」が披露されると観客から大きな拍手が送られた。



<b>視点・点描</b>	3
人口減社会に挑む山北町	
<b>講演録</b>	4
「人口動態から考える地域活性化と中小企業経営 —三浦半島の観光振興と世帯構成激変への適応」 ちばぎん総合研究所顧問 額賀 信	
<b>政治</b>	8
解散めぐりと野党すくみ合い 低い期待、新党4番手スタート	
<b>国際</b>	10
中国の中間層急拡大 欲求レベル高まり不満増幅	
<b>くらし2012</b>	12
増えてきた肥満手術	
<b>広告珍談</b>	14
～福沢諭吉のおしえ⑧ 新聞は商品なり	
<b>経済反射鏡</b>	15
中国、小ぶり対策続く？ 改革派主導で経済失速気味	

### 事務局だより

#### ◇横浜定例講演会

2012年8月21日(火)

13時30分～15時

ロイヤルホールヨコハマ

講師は原田武夫国際戦略情報  
研究所代表取締役(CEO)の  
原田 武夫 氏

演題は「国際経済と朝鮮半島  
情勢について」(仮題)

#### ◇横浜定例講演会

2012年9月14日(金)

13時30分～15時

ホテルキャメロットジャパン

講師はSMBC日興証券株式  
調査部副部長の大西 史一氏

演題は「世界経済と金融市場  
の動向について～注目ポイン  
ト“3つのマクロ的転換”～」

(仮題)

# 視点 点描



## 人口減社会に挑む山北町

では人口減少が既に現実のものとなっており、山北町の取り組みは、県内の自治体がやがて直面するであろう課題を先取りしているともいえる。

山北町の取り組みは、ピンチはチャンス発想から、積極的な定住促進策を打ち出しているのが特徴だ。2009年2月に「定住総合対策事業大綱」を策定して定住

「き家バンク」制度。さらに昨年からは、町への移住を考える人たちにを対象に物件を実際にワゴン車で回る「空き家見学ツアー」も。こちらは、ツアーの合間にそば打ち体験や地域活動の紹介、住民との意見交換といった要素も盛り込む日程が、定住後の生活をイメージしやすいと好評だという。

県内の自治体がいま、人口減少社会の到来という「強敵」に身構えている。地域から活力を奪いかねない負の現象。着実に迫り来るその足音を聞き逃すまいと、耳を澄ませている。

990年)に1万4464人だった町の人口はこの12年間で3千人近く減少。人口の規模を維持する「定住促進策」が、待ったなしの行政課題として急浮上しているからだ。

「来てー見てー住んでーやまき」を合言葉に進められている施策の一つが、地元の不動産業者と連携し、住む人がいなくなった住宅や土地などの物件情報を町のホームページなどで発信する「空

これから同町で子育てをしようという若い世代の転入も歓迎しており、50歳未満の転入者が住宅を新築した場合に20万円を贈ったり、出産祝い金や子どもの医療費の助成を手厚くするなどの支援策も打っている。施策が本格化した

県西部に位置し、丹沢の山々に抱かれた山北町も、早い時期からこの足音に気付き、危機感を持ってその対処法を練ってきた自治体の一つだ。なにしろ、ピーク時(1

今年6月時点で907万人の人口を擁する神奈川県も、推計では7年後の2019年をピークに人口が減少に転じる、と予測されている。県西部や横須賀・三浦地域

「来てー見てー住んでーやまき」を合言葉に進められている施策の一つが、地元の不動産業者と連携し、住む人がいなくなった住宅や土地などの物件情報を町のホームページなどで発信する「空

09年以降の定住者は55組を数える。県全体が人口減少社会に転じる時期が迫るなか、緑深い同町のユニークな挑戦に着目したい。

(神奈川新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也)



# 新聞は商品なり

図をご覧ください。1892(明治25)年9月27日、大阪毎日新聞の1部である。

小説のように見えるが、5回連載の翻訳記事『商業と広告』である。翻訳した筆者は大阪毎日新聞の主筆・渡辺治。

イギリスのチャートー・ウインクス書房から出版された、広告史家ヘンリー・サムソンの著書を、友人の高橋義雄がロンドンから持ち帰った。借り受けて読んでみると、商業が高度に発達したイギリスにおける貴重な広告の歴史である。渡辺は書きはじめる。そして、「昔の人間は、一度見た商品は永く記憶して忘れざれども、今の人間には、五度も十度もその存在を示さざれば決して注意して呉れざるなり。」「人非常に忙はしき

が故に、一遍や二遍にては、容易に物に気を留むるのいとまなきに因るのみ」と、

福沢諭吉の「廣告のすすめ」と同じ論旨(1920号をどうぞ)である。

渡辺は高橋とともに慶応義塾を卒業、『時事新報』の記者。89(明治22)年、大阪毎日新聞に招かれ主筆になったが93(明治26)年、29歳の若さで死去した。

渡辺を招聘したのは慶応でも、

伴ってはもう一方には広告料金を多く集めるといふことでありま

日新聞掲載



『時事新報』でも先輩の本山彦一。のち毎日新聞の社長になった本山は、「新聞は高尚な仕事である。学者の仕事に相違ない。けれども、それを拵えてしまつて売出す以上は、どうしても商品として広く売る方法を考へなければならぬ。」「人に金を出させて買

わせる以上、人の便利に供する以上、やはり多くの人の好むやうな生活上、その必要を充たすような商品主義でなければならぬ。」「新聞を「多く売る、それに

す」。『新聞社の収入の半ば以上が広告料であるといふことは申すまでもない』と遺稿集にある。本山は1853(嘉永6)年、熊本生まれ。1911(明治44)年、東京日日新聞を毎日新聞に合併。新聞商品主義をつらぬいて、毎日

を3大紙のひとつに発展させた。高橋にもどる。三越の業務は06(明治39)年、専務の日比翁助にすべてをゆだねて三井鉱山の社長、王子製紙の社長を歴任。11(明治44)年、実業界から引退。箒庵の雅号で茶湯の研究に打ち込んだ。すぐれた経営者で教寄者である松永安左工門(東邦電力社長)や畠山一清(荏原製作所社長)が、茶友小林の追想文を書いている。小林は、尊敬する高橋と、茶席とともにしたのだろうか。

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住) (図) 翻訳記事『商業と広告』・1 892(明治25)年9月、大阪毎日新聞掲載